

# IN THE UNITED STATES PATENT AND TRADEMARK OFFICE

#2

In re PATENT APPLICATION of  
Inventor(s): Tadashi SUGIYAMA

JC832 U.S. PTO  
**10/034166**  
12/28/01

Appln. No.:	Not	Assigned
Series Code	↑	↑ Serial No.

Group Art Unit: Unknown

Filed: December 28, 2001

Examiner: Unknown

Title: DIGITAL-AUDIO-SIGNAL RECORDING APPARATUS

Atty. Dkt. P 0277030	H7617US
M#	Client Ref

Date: December 28, 2001

## SUBMISSION OF PRIORITY DOCUMENT IN ACCORDANCE WITH THE REQUIREMENTS OF RULE 55

Hon. Asst Commissioner of Patents  
Washington, D.C. 20231

Sir:

Please accept the enclosed certified copy(ies) of the respective foreign application(s) listed below for which benefit under 35 U.S.C. 119/365 has been previously claimed in the subject application and if not is hereby claimed.

<u>Application No.</u>	<u>Country of Origin</u>	<u>Filed</u>
2000-401811	Japan	December 28, 2000

Respectfully submitted,

Pillsbury Winthrop LLP  
Intellectual Property Group

725 South Figueroa Street, Suite  
2800  
Los Angeles, CA 90017-5406  
Tel: (213) 488-7100

By Atty: Roger R. Wise

Reg. No. 31204

Sig: 

Fax: (213) 629-1033  
Tel: (213) 488-7584

Atty/Sec: RRW/jes

日本国特許庁  
JAPAN PATENT OFFICE

Jc832 U.S. PTO  
10/034166  
12/28/01

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office

出願年月日  
Date of Application:

2000年12月28日

出願番号  
Application Number:

特願2000-401811

出願人  
Applicant(s):

ヤマハ株式会社

CERTIFIED COPY OF  
PRIORITY DOCUMENT

2001年11月 2日

特許庁長官  
Commissioner,  
Japan Patent Office

及川耕造



出証番号 出証特2001-3096658

【書類名】 特許願

【整理番号】 20000616

【提出日】 平成12年12月28日

【あて先】 特許庁長官 殿

【国際特許分類】 G11B 19/02 501

【発明者】

【住所又は居所】 静岡県浜松市中沢町10番1号  
ヤマハ株式会社内

【氏名】 杉山 正

【特許出願人】

【識別番号】 000004075

【氏名又は名称】 ヤマハ株式会社

【代理人】

【識別番号】 100084548

【弁理士】

【氏名又は名称】 小森 久夫

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 013550

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9001567

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 デジタルオーディオ信号録音装置

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 ディスク状記憶媒体に記憶されているデータを読み取るディスクドライブと、

前記ディスク状記憶媒体から読み取ったデジタルオーディオデータを記憶するハードディスクドライブと、

ディスク状記憶媒体から読み出されたコピー可否情報の内容がコピーを許可するものであった場合のみ、前記ディスク状記憶媒体から読み取られたデジタルオーディオデータをハードディスクドライブに書き込むインタフェース制御手段と、

を備えたデジタルオーディオ信号録音装置。

【請求項 2】 デジタルオーディオデータを記憶したハードディスクドライブと、

デジタルオーディオデータをディスク状記憶媒体に書き込む媒体書込手段と

ハードディスクドライブに記憶されているデジタルオーディオデータを媒体書込手段によってディスク状記憶媒体に書き込むとともに、ハードディスクドライブに記憶されている該デジタルオーディオデータを消去するインタフェース制御手段と、

を備えたデジタルオーディオ信号録音装置。

【請求項 3】 デジタルオーディオデータおよびサブコード情報を記憶したハードディスクドライブと、

データをディスク状記憶媒体に書き込む媒体書込手段と、

前記ハードディスクドライブからデジタルオーディオデータおよびサブコード情報を読み出し、これらを CD-DA フォーマットに編集して媒体書込手段に供給するインタフェース制御手段と、

を備えたデジタルオーディオ信号録音装置。

【請求項 4】 前記インタフェース制御手段はバスインタフェースを備え、

ディスク状記憶媒体から読み取ったデジタルオーディオデータのハードディスクドライブへの書き込み、および、前記コピー可否情報の抽出処理をバスインタフェースが行う請求項 1 に記載のデジタルオーディオ信号録音装置。

【請求項 5】 前記ハードディスクドライブは、ディスク状記憶媒体複数枚分のトラックのデジタルオーディオデータを記憶し、

前記インタフェース制御手段は、前記ハードディスクドライブに記憶されたデジタルオーディオデータを再生出力し、

前記ディスク状記憶媒体複数枚分のトラックのなかから任意のトラックを選択して前記インタフェース制御手段に対して再生すべきトラックとして指定する選曲制御手段を備えた請求項 1 または請求項 4 に記載のデジタルオーディオ信号録音装置。

【請求項 6】 前記選曲制御手段は、前記ディスク状記憶媒体複数枚分のトラックのなかから選択したトラックのリストをアルバムとして記憶する手段を含む請求項 5 に記載のデジタルオーディオ信号録音装置。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

この発明は、オーディオデータが記憶されている CD からハードディスクにオーディオデータを記憶するデジタルオーディオ信号録音装置に関する。

【0002】

【従来の技術】

CD に記憶されているオーディオデータをハードディスクにコピーし、これを再度 CDR ディスクに書き込んで CD を作成する装置としては、従来より業務用の専用機が実用化されているほか、パーソナルコンピュータおよびソフトウェアで同様の機能を実現することも可能であった。

【0003】

【発明が解決しようとする課題】

しかし、パーソナルコンピュータは操作が面倒であるため、一般のオーディオ愛好家が使用するのには容易でなかった。一方、業務用の専用機は、操作方法は分

かりやすいが連鎖的なデジタルコピーが可能であるため、民生用の機器として用いることはできなかった。

【0004】

この発明は、民生用機器として使用できるデジタルオーディオ信号録音装置を提供することを目的とする。

【0005】

【課題を解決するための手段】

請求項1の発明は、ディスク状記憶媒体に記憶されているデータを読み取るディスクドライブと、前記ディスク状記憶媒体から読み取ったデジタルオーディオデータを記憶するハードディスクドライブと、ディスク状記憶媒体から読み出されたコピー可否情報の内容がコピーを許可するものであった場合のみ前記ディスク状記憶媒体から読み取られたデジタルオーディオデータをハードディスクドライブに書き込むインタフェース制御手段と、を備えたことを特徴とする。

【0006】

この発明では、ディスク状記憶媒体に記憶されているデジタルオーディオデータのコピー可否情報を判断し、コピーが許可されていない場合には、そのデジタルオーディオデータを内部のハードディスクドライブに書き込まない。これにより、連鎖的なデジタルコピーが禁止され、ハードディスクレコーダなどの録音装置を民生用機器として使用することができるようになる。

【0007】

請求項2の発明は、デジタルオーディオデータを記憶したハードディスクドライブと、デジタルオーディオデータをディスク状記憶媒体に書き込む媒体書込手段と、記憶手段に記憶されているデジタルオーディオデータを媒体書込手段によってディスク状記憶媒体に書き込むとともにハードディスクドライブに記憶されている該デジタルオーディオデータを消去するインタフェース制御手段と、を備えたことを特徴とする。

【0008】

この発明では、ハードディスクドライブに記憶しているデジタルオーディオデータを他の記憶手段であるディスク状記憶媒体に書き込んだ場合には、このオ

オーディオデータをハードディスクドライブから消去する。これにより、このオーディオデータがコピーであった場合でも、連鎖的なデジタルコピーとならずいわゆる転記となり、連鎖的なデジタルコピーが禁止され、ハードディスクレコーダなどの録音装置を民生用機器として使用することができるようになる。

## 【0009】

請求項3の発明は、デジタルオーディオデータおよびサブコード情報を記憶したハードディスクドライブと、データをディスク状記憶媒体に書き込む媒体書込手段と、前記ハードディスクドライブからデジタルオーディオデータおよびサブコード情報を読み出しこれらをCD-DAフォーマットに編集して媒体書込手段に供給するインタフェース制御手段と、を備えたことを特徴とする。

## 【0010】

この発明では、ハードディスクドライブにデジタルオーディオデータとオーディオCDにサブコードとして記録されているサブコード情報とを別々に記憶しておき、ディスク状記憶媒体に書き込むときにこれをCD-DAフォーマットに編集して供給するようにした。これにより、テキスト情報などを含む音楽CDのコピーや作成が可能になる。

## 【0011】

請求項4の発明は、請求項1の発明において、前記インタフェース制御手段はバスインタフェースを備え、ディスク状記憶媒体から読み取ったデジタルオーディオデータのハードディスクドライブへの書き込みおよび前記コピー可否情報の抽出処理をバスインタフェースが行うことを特徴とする。

## 【0012】

請求項5の発明は、請求項1、4の発明において、前記ハードディスクドライブはディスク状記憶媒体複数枚分のトラックのデジタルオーディオデータを記憶し、前記インタフェース制御手段は前記ハードディスクドライブに記憶されたデジタルオーディオデータを再生出力し、前記ディスク状記憶媒体複数枚分のトラックのなかから任意のトラックを選択して前記インタフェース制御手段に対して再生すべきトラックとして指定する選曲制御手段を備えたことを特徴とする。

## 【 0 0 1 3 】

請求項 6 の発明は、請求項 5 の発明において、前記選曲制御手段は、前記ディスク状記憶媒体複数枚分のトラックのなかから選択したトラックのリストをアルバムとして記憶する手段を含むことを特徴とする。

## 【 0 0 1 4 】

この発明では、媒体書込手段からハードディスクドライブへの書き込みおよびサブコードとして読み出されたコピー可否情報を抽出する処理を CPU を介さないでバスインタフェースが行うようにしていることで CPU の負荷を軽減し、廉価な CPU を用いた場合でも高速のコピーが可能になり、廉価な民生用機器を構成することが可能になる。また、ハードディスクドライブにはオーディオ CD 複数枚分のトラック（曲）を記憶することができるが、これを自由に組み合わせて再生できるようにしたことにより、CD の交換時間が殆どない極めて高速の CD チェンジャとして機能させることができる。

## 【 0 0 1 5 】

なお、この発明におけるディスク状記憶媒体としては、CD、DVD、MD など種々のものを適用することができる。

## 【 0 0 1 6 】

## 【発明の実施の形態】

図面を参照してこの発明の実施形態であるデジタルオーディオ信号録音装置について説明する。図 1 は同デジタルオーディオ信号録音装置のブロック図である。コントローラ 2 は、ATAPI インタフェース 20、サブコード検出部 21、デジタルオーディオインタフェース 22、アナログオーディオインタフェース 23 を有している。コントローラ 2（ATAPI インタフェース 20）には ATAPI バス 11 を介して CD ドライブ 4、ハードディスクドライブ（以下単にハードディスクという）5 が接続されている。また、コントローラ 2（ATAPI インタフェース 20）には、メモリバス 12 を介して FIFO メモリ 3 が接続され、CPU バス 10 を介して CPU 1 が接続されている。CPU バス 10 には、CPU 1、コントローラ 2 のほか ROM 6、RAM 7 が接続され、CPU 1 にはユーザインタフェース 8 が接続されている。



## 【0017】

コントローラ2のデジタルオーディオインタフェース22は、光ファイバおよび同軸ケーブルの入力端子および光ファイバおよび同軸ケーブルの出力端子を有している。また、アナログオーディオインタフェース23は、入力用のADコンバータ25および出力用のDAコンバータ24を有している。サブコード検出部21は、オーディオデータが記憶されたCD（以下「オーディオCD」という）から読み出されるCD-DA規格のデータからサブコード情報を分離してデコードし、トラック番号、コピー可否情報などを読み取る。サブコード検出部21はサブコード情報を一時記憶するバッファを蓄え、これをハードディスク5およびCPU1に転送する。

## 【0018】

CPU1は、装置全体の動作を接続し、コントローラ2に対して、何処からデータを読み込んで何処に出力するかを指示する。また、CPU1はハードディスク5に記憶されるファイルを管理する。このファイル管理は、同じハードディスク5上に設定されるファイル管理テーブル（図5参照）に基づいて行う。

## 【0019】

ユーザインタフェース8は、図2に示す操作パネル面に設けられた操作子群および表示部を有している。操作子としては、通常のCDプレーヤと同じようなプレイボタンや停止ボタンなどのスイッチ群、ディスクやトラックを選択するためのマルチジョグダイヤルなどが設けられている。また、表示部は、選択されたまたは再生中のトラック番号などを表示する。なお、この実施形態では、トラックと曲とは1対1で対応しており同義語として用いている。

## 【0020】

前記CDドライブ4は、いわゆるCD-RWドライブであり、オーディオCDをセットしてオーディオデータを読み取ることができるとともに、ライトワンスのCDRディスクやリライタブルのCDRWディスクへオーディオデータを書き込むことができるものである。以下、CDRディスクおよびCDRWディスクを総称してCDRディスクという。またハードディスク5は、20GB程度の記憶容量を有し、30枚～40枚のオーディオCDのデータを蓄積記憶することがで

きる。ただし、ハードディスク5の記憶容量については特に制限を設けるものではない。

#### 【0021】

ここで、図3を参照してオーディオCDの記憶フォーマットであるCD-DA（コンパクト・ディスク・デジタル・オーディオ）規格について説明する。CD-DA規格では、オーディオ信号を、サンプリング周波数44.1kHz、2チャンネル、16ビット量子化でデジタルデータ化し、このサンプリングデータを6サンプリング毎にCIRCによるパリティを付加してフレーム化している。すなわち、CIRCによるパリティが追加された32シンボルを1フレームとしており、これが6サンプリング相当となる。したがって、1フレームの繰り返し周期は、サンプリング周波数44.1kHz $\div$ 6=7.35kHzとなる。また、フレームには、同期信号（24ビット）、サブコード情報（1バイト）などが付加される。これにより、1フレームは588ビットで構成される。このフレームデータをCIRCエンコードし、EFM変調したものがオーディオCDに書き込まれているオーディオデータである。

#### 【0022】

上記のサブコード情報は、オーディオCDによる音楽再生を効率的に行うための付加情報であり、曲の番号、インデックス、時間などの情報、さらには文字、グラフィックなどが定められている。1フレーム（7.35kHz）ごとに1バイトのデータを入れることができるが、上記のように多種類の情報を入れるために、98フレームを単位とするサブコードフレームを形成し、98バイトで1かたまりのサブコード情報となるようにしている。この98フレームを1セクタと呼んでいる。したがって、7.35kHz $\div$ 98=75Hzがセクタ（サブコードフレーム）の繰り返し周期となる。1フレームにサブコード情報として付加される1バイトの各ビットは、1セクタでそれぞれ98ビットずつになるが、各ビット毎にPチャンネル、Qチャンネル、Rチャンネル、Sチャンネル、Tチャンネル、Uチャンネル、Vチャンネル、Wチャンネルと呼ばれ、各チャンネル毎に異なる内容の情報が書き込まれる。このうち、Qチャンネルに全トラック数（全曲数）、トラック番号（曲番号）、時間情報や著作権制御信号などが書き込まれ

る。

#### 【0023】

上記のようなフォーマット・変調で書き込まれているオーディオCDからデータを読み出して復調する処理はCDドライブ4が行い、このデータをATAPIバスに載せてコントローラ2に送信する。コントローラ2は、CDドライブ4から読み出されATAPIバスに載せて送信されたデータから、フレームごとのサブコード信号を抽出してサブコード情報とする処理を行う。また、ハードディスク5からCDドライブ4にデータをコピーもしくは転送する際には、記憶されているオーディオデータおよびサブコード情報をCDドライブ4に出力する処理もコントローラ2が行う。コントローラ2は例えば専用LSIで構成される。

#### 【0024】

コントローラ2は、CDドライブ4にセットされたオーディオCDの読み出し、CDドライブ4にセットされたCDRディスクへの書き込み、ハードディスク5の書き込み・読み出し、および、オーディオデータの外部入出力を制御する。コントローラ2は、CPU1からの指示に応じて、上記制御機能を組み合わせて抽出モード処理、再生モード処理、書込モード処理を実行する。抽出モード処理は、CDドライブ4にセットされたオーディオCDからオーディオデータを抽出してハードディスク5に記憶する処理である。再生モード処理は、CDドライブ4にセットされたオーディオCDまたはハードディスク5に記憶されているオーディオデータを読み出してデジタルオーディオインタフェース22またはアナログオーディオインタフェース23から出力する処理である。また、書込モード処理は、ハードディスク5に記憶されているオーディオデータをCDドライブ4にセットされているCDRディスクに書き込むとともにハードディスク5の元データを消去する処理である。

#### 【0025】

上記抽出モード処理、再生モード処理、書込モード処理において、FIFOメモリ3はデータ処理を円滑に行うためのバッファとして用いられる。FIFOメモリとしては、専用のFIFOメモリデバイスを用いてもよいが、通常のRAMを使用してもよい。この場合には、RAM上にFIFOエリアを確保しておき、

F I F Oエリアの先頭アドレスに書込アドレス、読出アドレスを加算するようにすればよい。

【0026】

このデジタルオーディオ信号録音装置は、民生用機器であるため、デジタルオーディオの無制限なコピーを禁止するSCMS（シリアル・コピー・マネジメント・システム）によるコピー制限機能を備えている。このSCMSは、上記抽出モード、再生モード、書込モードの各モードの処理において以下のように機能する。

【0027】

抽出モードは、オーディオCDから読み出したオーディオデータをハードディスク5にデジタルコピーする処理であるが、読み出したオーディオデータ（フレームデータ）から分離解読されたサブコード情報にコピー禁止コードが書き込まれている場合には、このオーディオデータ（トラック）のコピーを禁止する。SCMSでは、オリジナルCDからデジタルコピーされたオーディオデータのサブコード情報にコピー禁止コードを書き込み、いわゆる孫コピーができないようにされている。また、読み出したオーディオデータのサブコード情報がコピー許可であった場合でも、このオーディオデータをハードディスク5に書き込むとともに、このオーディオデータに対するファイル管理情報にコピー禁止コードを書き込む。すなわち、このオーディオデータのコピーを許可するといわゆる孫コピーになってしまうためである。したがって、ハードディスク5に記憶されたオーディオデータは消去することを条件にCDRディスクなどの他のメディアに書き込むこと（ムーブ）が許可される。

【0028】

再生モードは、オーディオCDまたはハードディスク5に記憶された（オリジナルのオーディオCDからコピーされた）オーディオデータを読み出してオーディオインタフェースから出力する処理であるが、読み出したオーディオデータから分離解読されたサブコード情報にコピー禁止コードが書き込まれている場合には、このオーディオデータはアナログオーディオインタフェース23から出力するとともに、デジタルオーディオインタフェース22からはコピー禁止のサブ

コードを付加して出力する。これによって、外部機器によるデジタル記憶を禁止する。なお、オーディオデータのサブコード情報がコピー許可であった場合には、このオーディオデータはアナログオーディオインタフェース23から出力するとともに、デジタルオーディオインタフェース22からコピー許可のサブコードを付加して出力する。

#### 【0029】

書込モードは、ハードディスク5に記憶されているオーディオデータをCDドライブ4にセットされているCDRディスクに書き込む処理であるが、書き込むオーディオデータのファイル管理情報がコピー禁止であった場合には、書き込みとともにこのオーディオデータをハードディスク5から消去する（書き込みおよび消去の手順は後述する）。CDドライブ4にセットされたオーディオCDやデジタルオーディオインタフェース22から入力されたオーディオデータを記憶した場合、そのデータに対するファイル管理情報はコピー禁止とされる。また、アナログオーディオインタフェース23から入力されたオーディオデータを記憶した場合には、そのデータに対するファイル管理情報は1世代のみコピー許可とされる。すなわち、オリジナルからの最初のコピーである子コピーの作成は許可されるが、その子コピーのコピーである孫コピーの作成は許可されない。これはSCMSの規格に基づく処理である。

#### 【0030】

オーディオCDからデータを読み出したとき、サブコード検出部21がサブコードを分離抽出してデコードし、これをCPU1に入力する。CPU1は、入力されたサブコードのうちコピー可否情報に基づいて上記の書き込みや出力の許可／禁止をコントローラ2に返信する。また、書き込み・再生（出力）時には、サブコード情報に含まれるトラック番号や時間情報をディスプレイに表示する。

#### 【0031】

図4（A）は、同デジタルオーディオ信号録音装置のファイル管理方式を説明する図である。上記の抽出モードでオーディオCDからオーディオデータがコピーされるとき、オーディオCD毎に1つのディスクディレクトリ（Disc1、2、3、…）が作成され、その下にこのオーディオCDから抽出したオーディ

オーディオファイル (Track 1、2、3、...) が作成される。利用者によるトラック (曲) の指定 (選曲) もディスク番号+トラック番号で行われる。

【0032】

また、利用者が、上記ディスクディレクトリの下に記憶されているオーディオデータを自由に組み合わせて再生 (またはCDRに書き込み) するためのアルバムを作成することができる。この図ではアルバムも上記ディスクと同様にディレクトリのように記載しているが、実際にはアルバムはディスクディレクトリ下にある複数のオーディオファイル (トラック) を指定するリストデータである。

【0033】

通常の再生モードの動作は、ディスクまたはアルバムを指定すると、そのディスクまたはアルバムに含まれている (当該ディスクディレクトリの下に記憶されている、または、当該アルバムリストで指定されている) トラックを順番に再生して停止する。なお、1曲のみの再生または複数のディスクまたはアルバムを通しての再生も可能である。

【0034】

同図 (B) は、ディスクディレクトリの下に記憶されている各オーディオデータファイル (トラック) を管理するファイル管理情報テーブルを示す図である。同図では、1つのファイルに対するレコードのみを記載している。ファイル管理情報テーブルは、各ファイル毎に、そのファイルを識別する情報 (ディスク番号 D<sub>m</sub>、トラック番号 T<sub>n</sub>)、ファイル有効性情報、消去状態フラグ、コピー可否情報、サブコード情報を記憶している。ファイル有効性情報は、当該ファイル (D<sub>m</sub>, T<sub>n</sub>) の存在/不存在を決定する情報であり、このファイル有効性情報が無効になっている場合には、このファイルのリンクが切られファイルが消去された状態になり、読み出しが不可能になる。すなわち、このファイル有効性情報はDOSのFAT情報のような制御プログラムレベルの情報である。消去状態フラグは、ハードディスク5からCDRディスクへのオーディオデータの転記 (ムーブ) 時に用いられるフラグであり、そのとき実行されている転記処理のための読み出しのみ許可し、それ以外のアクセスに対してはファイルが消去されたとして扱われる。コピー可否情報は、上記のデジタルコピーを許可するか否かを示す

コードである。また、サブコード情報は、オーディオCDに含まれていたサブコード情報と同等のものであり、たとえば曲のタイトルなどが含まれる。

#### 【0035】

図5は、コピー禁止とされているオーディオデータファイル（トラック）を転記するときのファイル管理情報の管理手順を説明する図である。処理前はファイル有効性情報は有効であり、消去状態フラグはリセットされてデータありを示している。転記処理がスタートすると消去状態フラグがセットされて消去状態にされ、実データ（オーディオデータ）およびサブコード情報が転記先（CD-Rディスクなど）に書き込まれる。そしてこの書き込みが正常に終了したとき転記先のファイル管理情報（ファイル有効性情報）が有効となる。

#### 【0036】

こののち、ファイル有効性情報を無効とし、ハードディスク5上のオーディオデータファイルを消去する。

#### 【0037】

このように転記前に消去状態フラグをセットし、転記終了後にファイル有効性情報を無効とすることにより、実データを消去状態にせずに転記以外の実データへのアクセスを無効にすることができ、たとえば、転記先への転記が終了した瞬間に電源が落ちるなどのアクシデントがあった場合でも、転記先および転記元（ハードディスク5）の両方に実データが残ってしまうというSCMSに反する状態を無くすることが可能になる。

#### 【0038】

図6～図10はこのデジタル録音装置の動作を示すフローチャートである。図6は、CDドライブ4にセットされたオーディオCDからオーディオデータを抽出してハードディスク5に記憶する抽出モードの処理動作示すフローチャートである。このフローチャートは、CPU1とコントローラ2の動作を示している。抽出モードが設定されているとき、利用者によってCDドライブ4にオーディオCDがセットされると（s1）、このオーディオCDのための新たなディスクディレクトリを作成する。そして、トラック番号を生成する（s3）。このトラック番号は1から順に生成される。そしてファイル管理情報テーブルにこのトラ

ックに対する管理情報レコードを作成する（s 4）。以上の処理はCPU 1が行う。この処理ののち、オーディオCDからデータを読み出し（s 5）、読み出したデータからサブコードを分離してバッファする（s 6）。この処理はコントローラ 2が行う。

#### 【0 0 3 9】

ここで、トラックの先頭のオーディオデータ（フレームデータ）を読み出したとき同図（B）の処理を行う。コントローラ 2がこのフレームデータから分離デコードしたサブコード情報をチェックし（s 1 1）、コピーが許可されているかを判断する（s 1 2）。そして、コピーが許可されている場合にはそのまま処理を継続するが、コピーが禁止されている場合には、このトラックをスキップしてs 1 0に進む。

#### 【0 0 4 0】

抽出を実行する場合は、オーディオCDから読み出したオーディオデータ本体（実データ）をF I F Oメモリ 3を経由してハードディスクに書き込む。このオーディオデータはs 3で生成されたトラック番号のオーディオファイルとなる。そして、必要なサブコード情報をファイル管理情報テーブルに保存する（s 8）。s 5以下の動作をこのトラックが終了するまで繰り返し実行する。トラックが終了すると、オーディオCDに次のトラックがある場合にはこの新たなトラックに対応するトラック番号をディスクディレクトリの下に生成して（s 3）、以下の動作を再度実行する。全てのトラックについてこの処理を終了した場合には動作を終了する（s 1 0）。

#### 【0 0 4 1】

図 7 は、再生モードの処理動作を示すフローチャートである。このフローチャートは、ハードディスク 5 に記憶されているオーディオデータの再生時の処理動作を示しており、CPU 1 が実行する処理動作を示している。再生モードが設定されると、まずディスク 1 のトラック 1 をデフォルトの選択曲として設定する（s 2 0）。そして、以下、プレイ操作、ストップ操作、ディスク選択操作、トラック選択操作（s 2 1 ～ s 2 4）に応じて以下の処理を実行する。

#### 【0 0 4 2】



プレイボタンを押すなどのプレイ操作が実行されると (s 2 1)、そのとき設定されているトラックの再生をスタートする (s 2 5)。また、ストップボタンを押すなどのストップ操作が実行されると再生動作を停止する (s 2 6)。

## 【0 0 4 3】

また、マルチジョグダイヤルによってディスク (またはアルバム) が選択されると (s 2 3)、選択されたディスクまたはアルバムの番号を選択ディスクとして設定し (s 2 7)、そのディスク (アルバム) のトラック 1 をデフォルトの選択曲として設定する (s 2 8)。そして現在再生中であれば、そのとき再生していたトラックをキャンセルして上記選択されたトラックにジャンプする (s 3 0)。

## 【0 0 4 4】

また、マルチジョグダイヤルによってトラックが選択されると (s 2 4)、選択されたトラック番号を選択曲として設定する (s 3 1)。そして、現在再生中であれば、そのとき再生していたトラックをキャンセルして上記選択されたトラックにジャンプする (s 3 0)。

## 【0 0 4 5】

図 8 は、再生モード時にコントローラ 2 が実行する処理動作を示すフローチャートである。CPU 1 から再生が指示されると、指定されたトラックのオーディオデータをハードディスク 5 から読み出し (s 4 0)、オーディオインタフェースに出力する。トラックが終了するまでこのファイルの読み出しを継続し (s 4 2)、トラックが終了するとディスク (アルバム) 内のトラックが終了するまで、次のトラックを選択してこの動作を繰り返す。そして、ディスク (アルバム) 内のトラックが終了すると再生を終了する。

## 【0 0 4 6】

このように、通常の再生モード処理はディスクまたはアルバム単位で行われ、ディスクまたはアルバムの最後の曲 (トラック) を再生したのち再生を終了する。この通常動作以外に、複数のディスク (アルバム) を通して再生する動作、1 曲のみを指定して再生する動作も可能である。

## 【0 0 4 7】

同図（B）は、トラックのスタート時に実行されるオーディオインタフェースへの出力制御動作を示すフローチャートである。この動作は、トラックの読み出しをスタートするとき実行される。まず、そのトラックに対応するファイル管理情報を読み出し（s 45）、コピー可否情報の内容を判断する（s 46）。コピーが許可されていれば、コピー許可のサブコード情報を付加してデジタルオーディオインタフェース22にオーディオデータを出力するとともに、アナログオーディオインタフェース23にもオーディオデータを出力する（s 47）。一方、コピーが禁止されていればコピー禁止のサブコード情報を付加してデジタルオーディオインタフェース22にオーディオデータを出力するとともにアナログオーディオインタフェース23にもオーディオデータを出力する（s 48）。これにより、コピーが禁止されているトラックのデジタル出力を防止することができる。

## 【0048】

図9はアルバム作成動作を示すフローチャートである。上記のようにアルバムとは、利用者が様々なトラックを組み合わせる1枚のディスクのように再生することができるリストである。アルバム作成モードが設定されると、まず今回作成するアルバムのアルバム番号を生成する（s 51）。アルバム番号は1から順に生成するようにすればよい。そしてアルバム中のトラック番号を指し示すiに1をセットする（s 52）。こののち、ディスク選択操作、トラック選択操作、選曲操作、終了操作に応じて対応する処理を実行する。マルチジョグダイヤルを用いてディスクが選択されると（s 53）、選択されたディスク番号を設定し（s 57）、このディスクのトラック1をデフォルトの選択曲として設定する（s 58）。また、マルチジョグダイヤルを用いてトラックが選択されると（s 54）、そのとき選択されているディスクの今回選択されたトラックを選択曲として設定する（s 59）。

## 【0049】

そして、選曲ボタンの押下などの選曲操作がされると（s 55）、そのとき選択曲として設定されているトラックをトラックiとして記憶する（s 61：図4参照）。こののち、iに1を加算して次の曲の選択に備える（s 62）。また、

終了操作がされると、これでこのアルバムの作成が終了であるためそのまま終了する。

#### 【0050】

なお、この処理動作は、新規のアルバムの作成動作を示しているが、既に作成されたアルバムの内容もそのアルバム番号、トラック番号を指定して内容を修正することができるものとする。

#### 【0051】

図10は、書込モードの処理動作を示すフローチャートである。この処理動作はディスクまたはアルバムをCDドライブ4にセットされたCDRディスクに書き込む処理動作であり、書き込みののちハードディスク5上のトラックを消去する転記動作である。

#### 【0052】

まず、書込モードにおいて、利用者によってCDRディスクに書き込むディスク（またはアルバム）の番号が指定される（s70）。そうすると、そのディスクまたはアルバムの先頭のトラック番号をコントローラ2に指示するとともに（s71）とともに、このトラックのファイル管理情報テーブルの消去状態フラグをセットして消去状態にする（s72）。そして、ハードディスク5からオーディオデータおよびサブコード情報を読み出し（s73、74）、これをCDの書き込みフォーマットに編集・変調して（s75）、CDRディスクに書き込む（s76）。s73～s74の処理はコントローラ2が行う。また、s75、s76の処理はコントローラ2とCDドライブ4が連携して行う。トラックの書き込みが終了すると（s77）、ハードディスク5上のトラックに対応するファイル管理情報の有効性情報が無効にされ、ハードディスク5上のこのトラックのデータは完全に消去されたことになる。これにより、CDからハードディスクにコピーされたオーディオデータからさらにコピーを作成することが出来なくなりSCMSに違反した不正なコピーをすることができなくなる。

#### 【0053】

上記の処理を指定されたディスク（アルバム）のトラック順に実行してゆき、選択されたディスク（アルバム）の全てのトラックの書き込みが終了すれば（s

79)、書き込まれたブランクCDのディスクがオーディオCDとして再生できるように終了処理をして(s80)、処理を終える。

【0054】

図10の書込モードの処理では、CDドライブ4にセットされたCDRディスクに対してオーディオデータを書き込んでいるが、デジタルオーディオインタフェース22から出力するようにしてもよい。

【0055】

【発明の効果】

この発明では、デジタルオーディオデータのコピー可否情報に基づいて記憶手段に書き込むか否かを決定することにより、連鎖的なデジタルコピーが禁止され、ハードディスクレコーダなどの録音装置を民生用機器として使用することができるようになる。

【0056】

この発明では、ハードディスクドライブに記憶しているデジタルオーディオデータを他のディスク状記憶媒体に書き込んだ場合には、このオーディオデータをハードディスクドライブから消去するようにしたことにより、連鎖的なデジタルコピーが禁止され、ハードディスクレコーダなどの録音装置を民生用機器として使用することができるようになる。

【0057】

この発明では、デジタルオーディオデータとサブコード情報とを別々に記憶している場合でも、テキスト情報などを含むオーディオCDのコピーや作成が可能になる。

【0058】

この発明では、CDドライブなどの媒体読取手段からハードディスクドライブへの書き込みおよびサブコード情報のチェックを主としてバスインタフェースを含む専用回路で行うようにしていることでCPUの負荷を軽減し、廉価なCPU

を用いた場合でも高速のコピーが可能になる。また、ハードディスクドライブにはオーディオCD複数枚分のトラック(曲)を記憶することができるが、これを

自由に組み合わせて再生できるようにしたことにより、CDの交換時間が殆どない極めて高速のCDチェンジャとして機能させることができる。

【図面の簡単な説明】

【図1】 この発明の実施形態であるデジタルオーディオ信号録音装置のブロック図

【図2】 同デジタルオーディオ信号録音装置の操作パネル面を示す図

【図3】 CD-DA規格における1フレームの構成を示す図

【図4】 同デジタルオーディオ信号録音装置のディスク、アルバムの構成およびファイル管理の方式を説明する図

【図5】 同デジタルオーディオ信号録音装置のファイル管理情報テーブルおよびその書き換えを説明する図

【図6】 同デジタルオーディオ信号録音装置の動作を示すフローチャート

【図7】 同デジタルオーディオ信号録音装置の動作を示すフローチャート

【図8】 同デジタルオーディオ信号録音装置の動作を示すフローチャート

【図9】 同デジタルオーディオ信号録音装置の動作を示すフローチャート

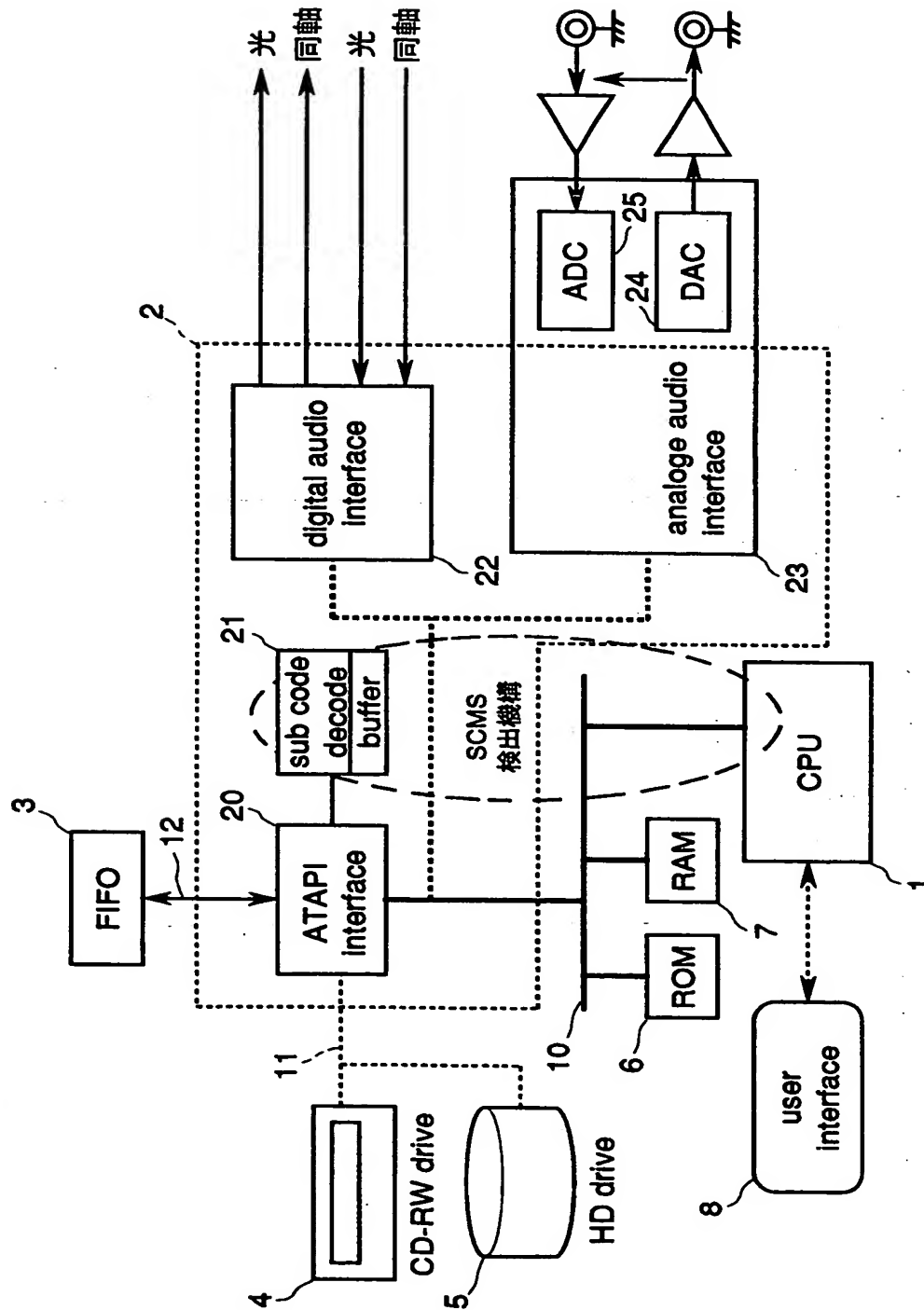
【図10】 同デジタルオーディオ信号録音装置の動作を示すフローチャート

【符号の説明】

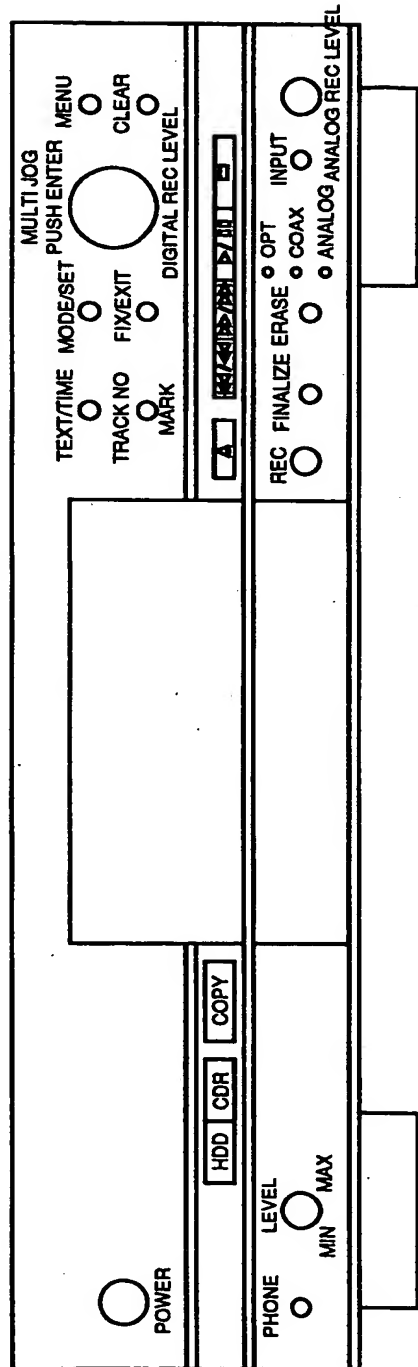
1…CPU、2…コントローラ、3…FIFOメモリ、4…CDドライブ、5…ハードディスク、6…ROM、7…RAM、8…ユーザインタフェース、10…CPUバス、11…ATAPIバス、12…メモリバス、20…ATAPIインタフェース、21…サブコード検出部、22…デジタルオーディオインタフェース、23…アナログオーディオインタフェース、24…DAコンバータ、25…ADコンバータ

【書類名】 図面

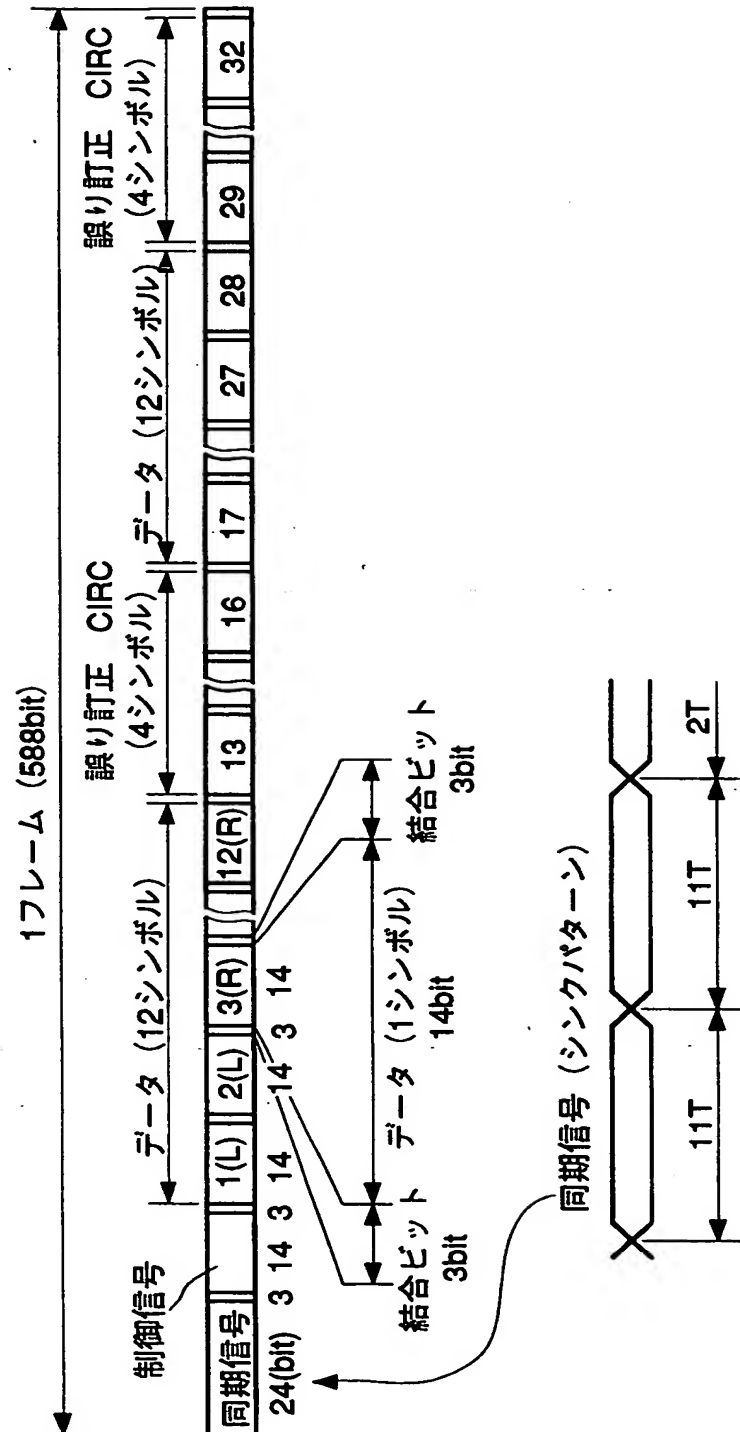
【図 1】



【図 2】

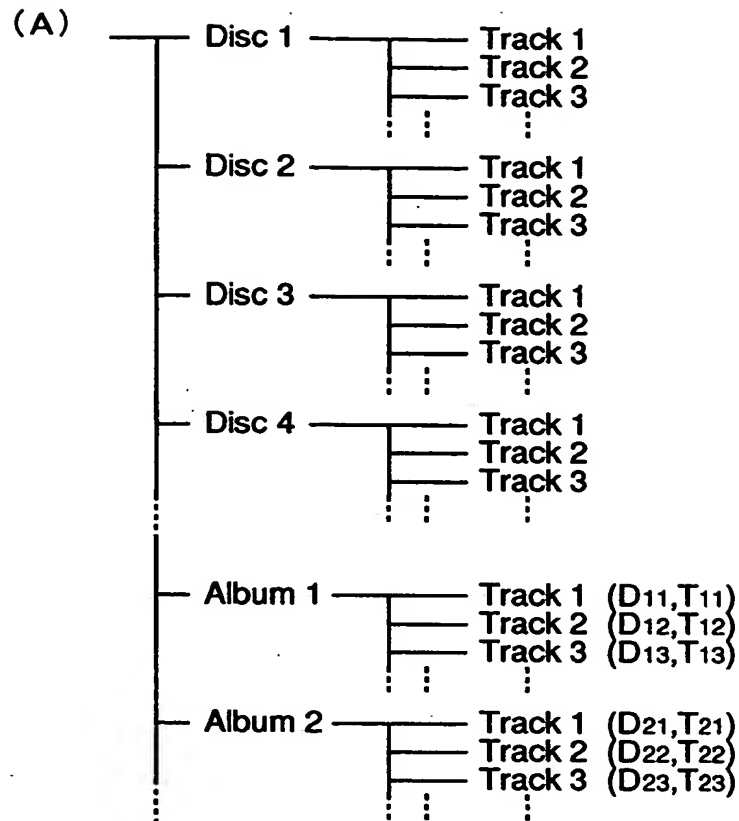


【図 3】





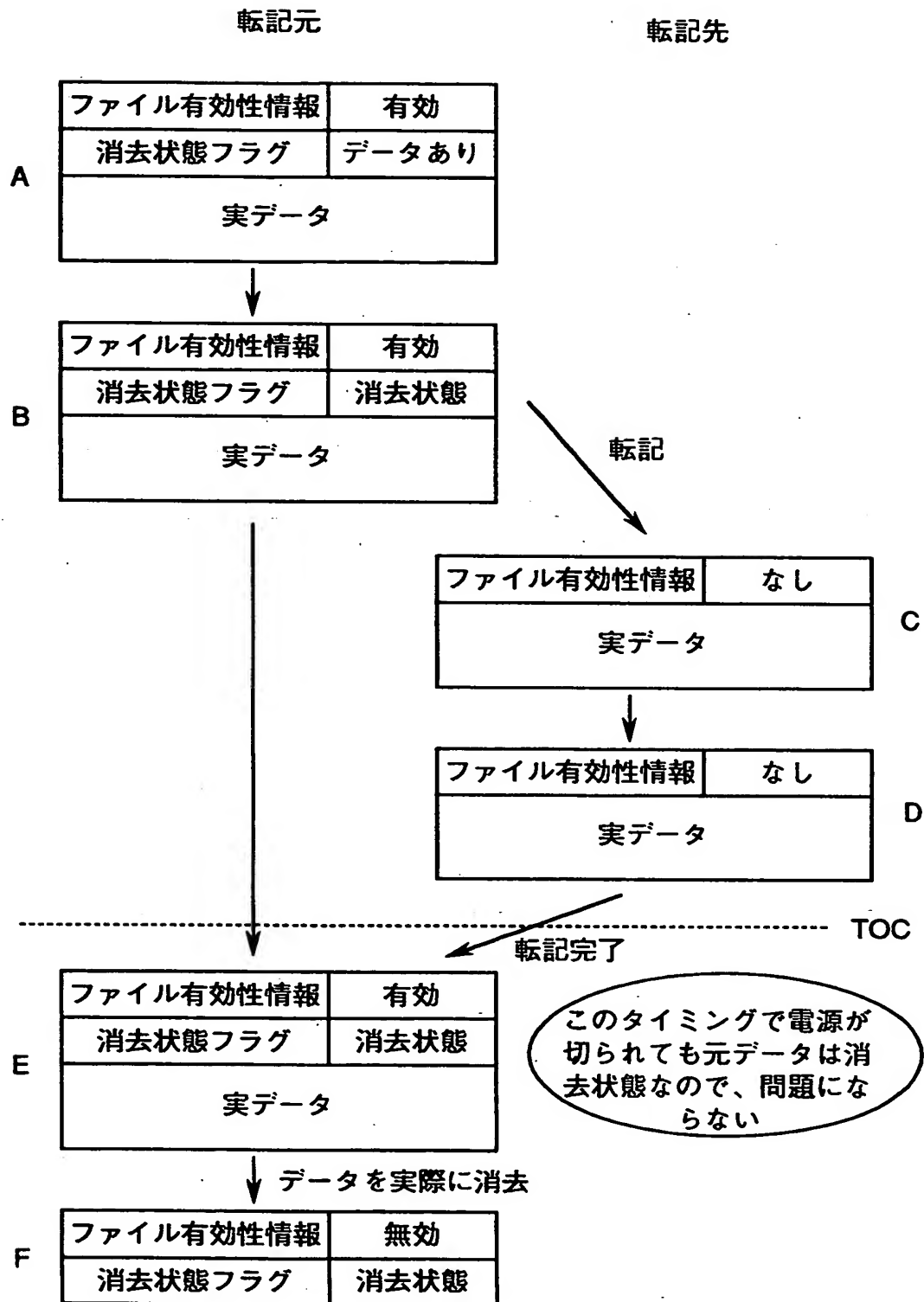
【図 4】



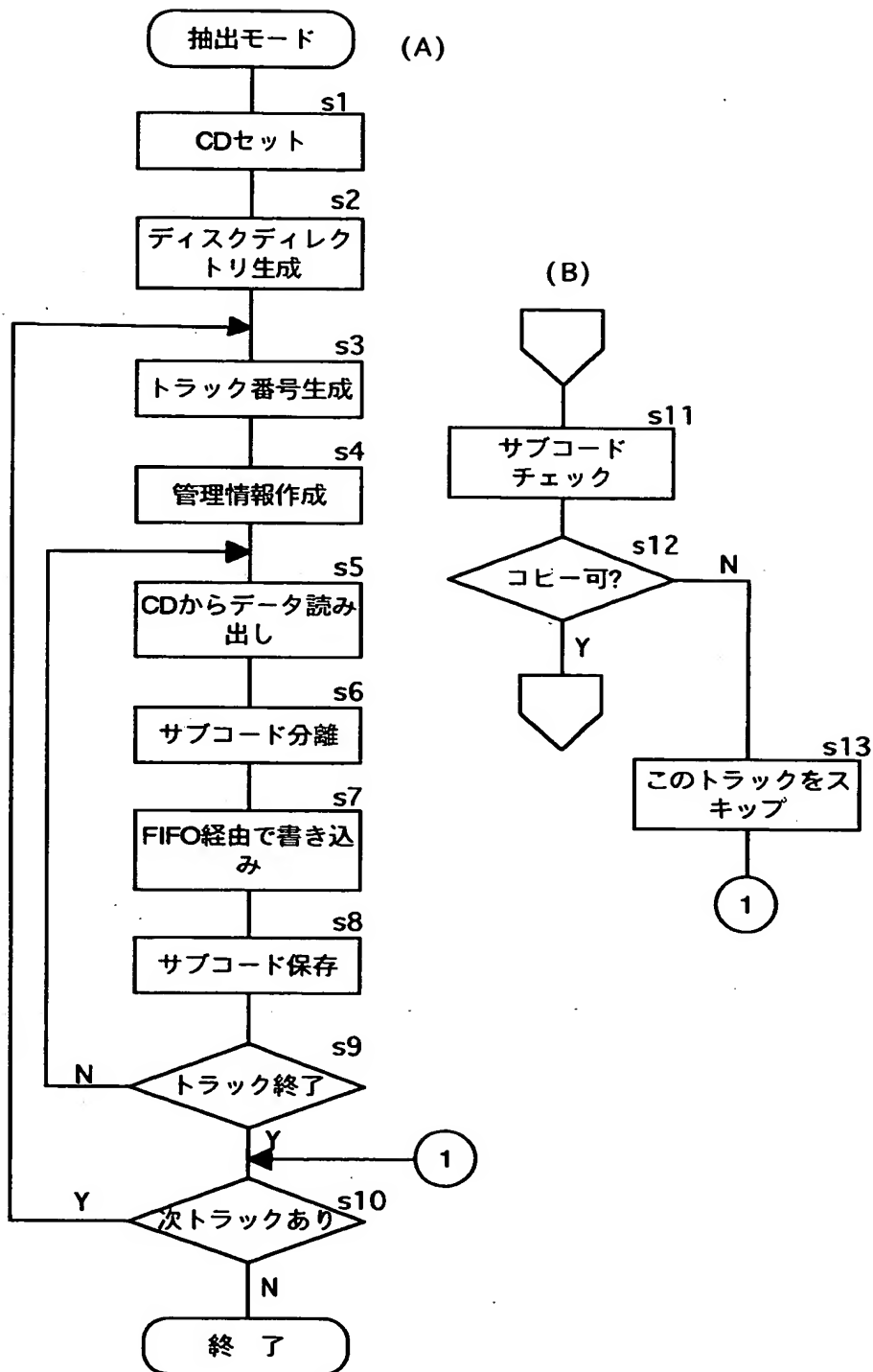
(B)

トラック識別情報(Dm, Tn)	ファイル有効性情報
	消去状態フラグ
	コピー可否情報
	サブコード情報

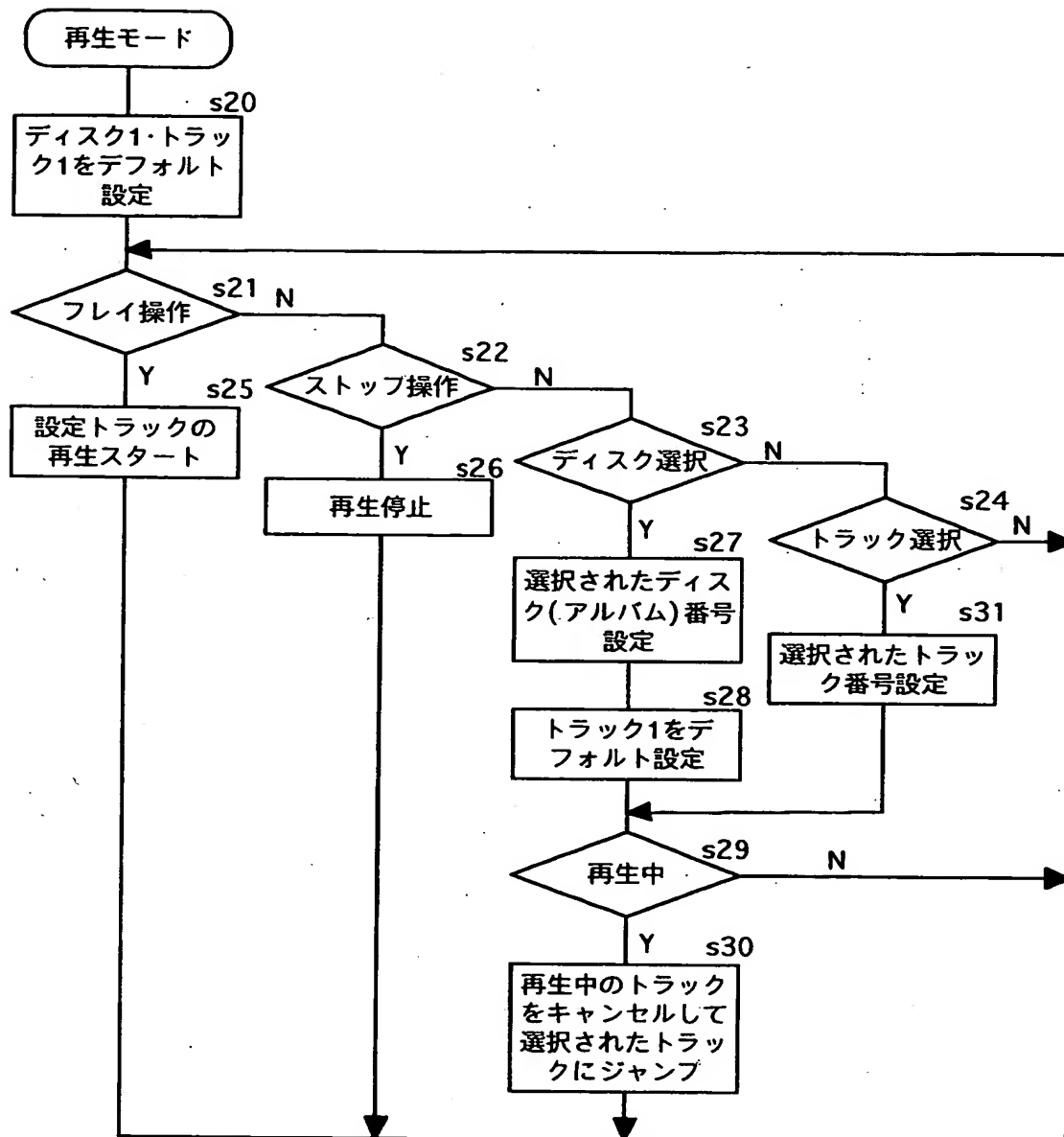
【図 5】



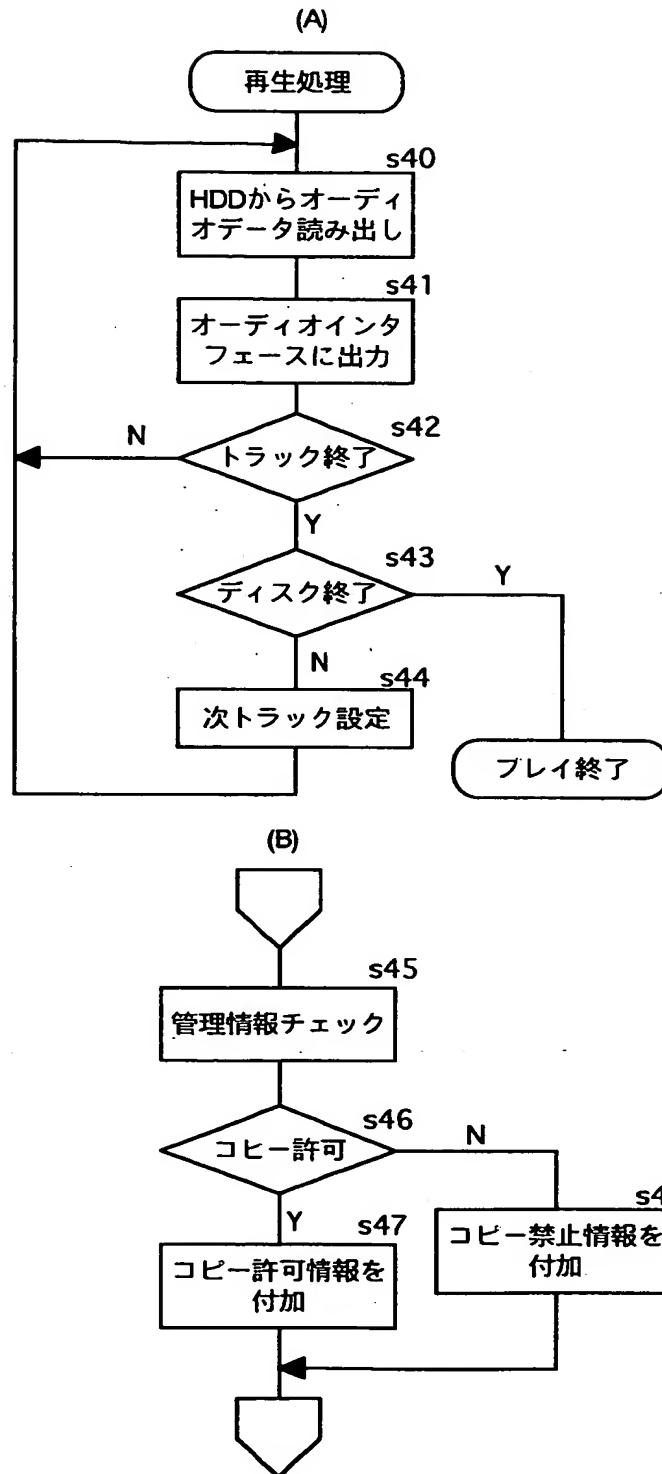
【図6】



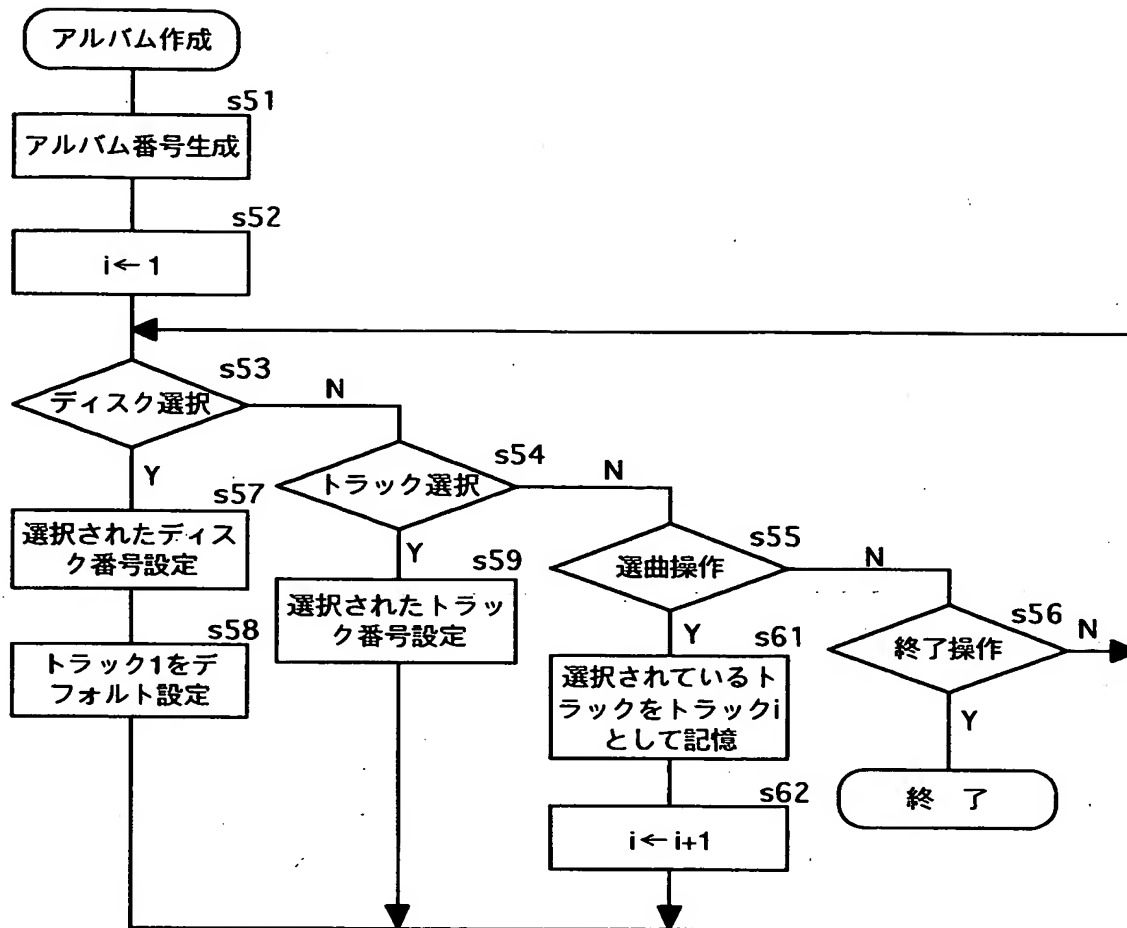
【図7】



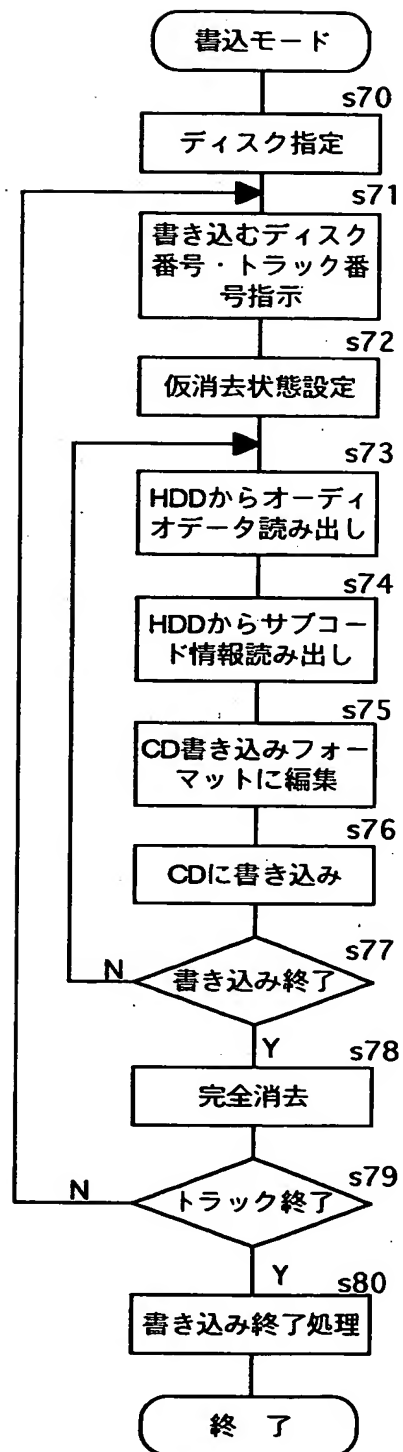
【図 8】



【図 9】



【図 1 0】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 民生用機器として使用できるデジタルオーディオ信号録音装置を提供する。

【解決手段】 CDドライブ4にセットされているオーディオCDからオーディオデータを抽出するとき、ATAPIインタフェース20を介して行うため、CPU1が低速であっても高速なコピーが可能になる。また、ハードディスク5に記憶されているオーディオデータを再生するときコピー可否情報がコピーを禁止するものであった場合には、デジタルオーディオインタフェース22からコピー禁止のサブコードを付加して出力し、また、ハードディスク5に記憶されているオーディオデータをCDドライブ4にセットされているCDRメディアに書き込むときは、書き込みとともにハードディスク上のデータを消去する。

【選択図】 図1



特2000-401811

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号

[000004075]

1. 変更年月日	1990年 8月22日
[変更理由]	新規登録
住 所	静岡県浜松市中沢町10番1号
氏 名	ヤマハ株式会社